

(本小論はエデュアール・オネジム研究の中に綴りこまれる予定の稿である)

学習院大学名誉教授 川口幸宏

文学的小品セガン作「筏師たち」と生誕の地クラムシー

エデュアール・セガンは、自身の生誕の地ニエヴル県クラムシー・コミューンについてほとんど語っていない。セガン自身による幼・少年期の回想以外では、『教育に関する報告』の中で「幼いころ、ニヴェルネ地方でのこと、市の広場で、小麦やオート麦が7種類の枡で量られ、売られるのを見ていた」と綴っているだけであるⁱ。クラムシーはニヴェルネ地方に属する。彼の生家の前を走るオ・バ・プティ・マルシェ通りⁱⁱに対して生家のほぼ前でT字形にぶつかっているプティ・マルシェ通りでは、「小麦市(le marché au blé)」が開かれていた。生家から市の様子を詳しく見ることができる位置関係にあるので、『教育に関する報告』における小麦市の記述はクラムシーでの生活的経験を綴ったものと断定してよい。

しかし、市の賑わいの様子については全く触れられておらず、小麦などを量る升が数で描写されているところは、セガンらしいと言えるのかもしれない。この後で引用する文学的小品「筏師たち」における細やかな数値的描写もそうだし、後の論述課題とする白痴教育実践の中でも数値が強い意味を持って示されている。セガンは言う、重さや尺度、通貨の「物差し」は人々にとって重要な意味を持つ、と。その原体験が小麦市を眺めていたことにあった。この体験は「市の賑わいぶり」という人々の生活味の味わいとは違った側面でのリアリティを持つ、後のセガンの教育方法観へと連結するものであった。

ところで、現在こそパリとクラムシーとを直接結ぶ産業はこれとってないが、16世紀から19世紀の終わりにかけて、両者を緊密に結びつけたのは、家庭用ペチカ、パン屋やクリーニング屋のかまど等で使用する薪材である。この産業の歴史を初めて体系的に綴った書物は、19世紀初期パリの商人組合長フレデリック・モロウ(Frédéric MOREAU) 著作になる『列車様にした筏の歴史 ジャン・ルーヴと古今の主な筏師たち』であるが、伝承に寄りかかった論説部もあり、今日では正史書としては認められていない。ただ、同書に収められている図版、関係文書類等、貴重な証言の書でもある^{iii・iv}。

パリで消費する薪材を200余kmも離れたクラムシー地方になぜ頼るのか、という問いには、パリという都市の成り立ち、発展とに密接にかかわることである、との返しが必要である。きわめて簡略に言うと、パリ成立期からしばらくは、周辺地の森林から用立てしていたが、パリ人口の爆発的增加に伴い、周辺森林の木材の枯渇となり、次第に遠隔地に薪材を求めていかなければならなくなったという都市発展事情がある。またその運搬システムの構築は、運搬の量、距離、方法の利便さなどが試行錯誤され、人・馬・牛の陸上運搬方式から、河川運搬方式へと変更されていった。そして、他の地域の河川運搬方式との決定的な差別化がなされたために、奥地にモルヴァンの森があるクラムシー地方を中心とする周辺地域のほぼ独占産業となったわけである^v。その差別化のキーワードが、「薪材で作る筏(le flot en bois chauffage)」「筏流し(le flottage)」「筏師(le flotteur)」である。そして、モルヴァンの森の所有者たちが16世紀半ばから20世紀半ばま

で、「暖房用木材パリ供給協会(la Partie de l'approvisionnement de Paris en bois de chauffage)」を確保していた、という史実を生み出したのである^{vi}。言うまでもなく、法的行政的保護(干渉)の下に置かれていた。たとえば、1882年に集成された筏師の権利と義務(les droits et obligations des flotteurs)に関する諸法集にそれを確認することができる^{vii}。

さて、セガンが誕生した19世紀初期のクラムシーの人口は約5500人であったと記録されている。住民のほとんどが薪材産業に関わる職種従事者とその家族。ただし、同業閑期は出稼ぎ労働に出たり零細農業などに従事したりした。各種薪材産業労働者を束ねる階層=「筏師」(以下、たんに、筏師と表記する。)はそのうち約250人^{viii}。1840年頃には、彼らは、頭目をクラムシー・コミューン議会に議員として送り出すほどの力を付けている。国政レベルにおいても、たとえば、1848年、男子普通選挙法が成立した初の国民議会選挙に打って出たニエヴル県を地盤とする候補者が、立候補声明の選挙公報ポスターに、「クラムシーの筏師たち、あなた方は我が友である・・・」との一文を挿入しているほどである^{ix}。

ちなみに筏師を束ねるのは「筏流しの請負業者(le faiseur de flottage)」である。請負業者は薪材業者(材木商。薪材商人とも言う。)から、薪材となる樫材伐採のはじめから最終的にパリの薪業者に売却するまでの全作業工程を請け負う。彼らは必ずしもクラムシー等の産業現場地区で生活していたわけではない。多くがパリに居宅を構えていた^x。

筏師はクラムシーを語る伝統風物詩である^{xi}。幾多の人が文学や詩などに綴っている。

かの文豪ロマン・ロランは故郷クラムシーの中世期を舞台にした名作『コラ・ブルニョン(Colas Breugnon)』を残している。老家具職人コラ・ブルニョンの日常の生活ぶりを綴ったものであるが、それ自体が16世紀クラムシーの歳時記となっている。旧クラムシー郭外ベトレーム地域に居を構える筏師が名脇役を固めている。「コラじいさん」が、憎まれ口相手の筏師について、「今は盛りの金持ち連中が落ちぶれようとも、墓碑に刻み込まれた彼らの虚飾まみれの碑文や一族の名が墓石とともに崩れ落ちようとも、クラムシーの筏師は口々に語り継がれよう。(Quand auront disparu ces riches d'aujourd'hui, quand seront effrités, avec leurs épitaphes, les mensonges de leurs tombes et le nom de leur race, on parlera encore des flotteurs de Clamecy.)」と称えているのである^{xii}。ロランが、同文学において、16世紀クラムシーで筏師がすでに地域行事ブドウの収穫祭の主要な役割を演ずる地位にいることを描いているように、筏師など河川労働者の守護神・聖ニコラは、クラムシーのあらゆる守護神の先頭を切るほどの社会的存在意義を持っていた。

筏師たちは、モルヴァンの森から木こり(bûcheron)^{xiii}によって切り出された樫の木枝の選別に始まり、パリでの商品となる薪材を独特の筏に建築し、河川を運行し(「筏流し」、パリの材木商に届ける高級職人である。その職能は父子相伝であったと言われる^{xiv}。

木こりによって切り出され選別された薪材用樫の木枝は、馬方(le charretier)によってヨンヌ川の各支流にまで運ばれ、川に投げ込まれ、自然の流れに任される。途中でいくつかのため池にため置かれ、そのことで自然に樹脂などが抜かれる。この自然を活用した知恵と技が、勢いよく燃え火勢を長持ちさせる評判の薪材を作り上げる。また、ここからが筏師の差配する作業となるが、ため池での作業は、商品にならないような木枝を選り分け^{xv}、薪材を所有者(山林から樫の木を買

い付けた商人) ごとに選り分けまとめる等といった作業がなされる。

ため池に数ヶ月ため置かれ樹脂をかなり抜き取られた薪材は、水温む春近くなると堰が開けられ、塊となってゆったりと河川を下る。そしてクラムシーで堰き止められる。モルヴァンの森で切り出された薪材がクラムシーに届くまで、おおよそ2年の歳月が経っている。

それらの薪材を筏に組み立てるところまで運搬するのはバン(les poules d'eau)と呼ばれる季節労働者たちであった。川から引き上げる作業は筏師の仕事である。筏師は薪材の所有者ごとに職能を提供するため、薪材に刻印されている所有者印の識別が可能なのである。

次に紹介するエデュアル・セガンが29歳の時に発表したエッセイ「筏師たち^{xvi}」(1841年)には、この2年の歳月の間の薪材筏流しの下支えとなる人々の存在およびその労働実態については一切触れられていない。しかしながら、筏制作、筏流し、筏師についてリアリティを持って綴られており、貴重な歴史証言としての意味を持っている。

なお、行替えは原文に従った。また、原文でイタリック体表記の箇所については下線を施した。

あなた方、この世の幸せ者、すてきなパリっ子たちで、誰か、快適な暖炉を進んで悪く言うような者がいるだろうか？渦巻く炎を見つめて過ごす時、パチパチ爆ぜる陽気な火花に見入り、やがて勢いが弱った炎をかき集め、とうとう最後の火が尽きようとしてしまうころ、炎に真顔で繰り返し訊ねる。結局は、移り気で思うにならない残り火のご託宣を呼び起こすことができなくなる。あなた方のところに田舎の人々が大都市に高く売りつけるこの貴重な燃料を届ける人に、どうして言わなかったのだろうか？霧に包まれたロンドンがパリをうらやむように。あなた方は次のようなところや人を知っている。サンゴで赤くなった海岸、砂にダイヤモンドが埋まっている裕福な国、カシミアの谷間、あなた方の白てんで白くなった雪の北国、手袋が手にはめられあるいは使われずにしまわれているヴェニス、あなた方のすてきな足下のジュータンを拡げるシミルン人、あなた方の頭に彼らのヴェールを無遠慮に投げるマリオン人、ヴァランシアン人、ブリュッセル。でもあなた方は、こうした楽しみがどれ一つとして1年の8か月の間は存在しなくなってしまうような、ただ一つの物を生みだしているところについて、知っていない。身体を温めてくれる燃える暖炉を囲んで、素晴らしい部屋で私たちが集うことがないとしても、あなた方はジュータン、ダイヤモンドや白てんの装身具が必要だろうか？

この薪材は、トラン(le train:貨列)に形が整えられ、筏師たちによって、モルヴァンの森から届く。このモルヴァン、このトラン、この筏師たち。疑いなく、最初是你の方の耳に届くが、忘れられてしまう三つの言葉、あなた方が知らない産業、あなた方の幸せな生活にとって決して疲労を覚えさせない奇妙な存在。一年中、いつも未開拓なようなこのモルヴァンの森は、それほど、豊かであり、気楽に、横柄に小川に垂らしているたくさんのコナラの小枝の冠を強調している。森が木々に言う — この冬パリは寒かろう。倦んでしまったこの都会をすこし暖めてやろう！ — それからゆったりとした流れがその重い宝物を運び、あらかじめ準備しておいた水門にため込む。すべての伐採木がぎっしりと塊を作る。

どれだけ時間がかかろうとも、流れはクラムシーに届く。そこで、薪材は鈎で川から引き出

され、ヨンヌ川の両岸に、人一人通り抜ける隙間なく長く高く積み揃えられる。こうして並べられた薪材は、たいてい、クラムシー近辺のアルム村(village d'Armes)からプッソー村(village des Pousseaux)に至る川沿いに広がる地域を占拠する。そうなのだ、川に沿ってくねくねと曲がりくねったこの帯状の地帯が好都合なのである。間違いなく、戦時の隊列は、この帯状が動き回るので、とても面白い。しかしこの隊列は威厳があるのでもなく、大きくもなく、小さくもなく、計り知れないというほどのものでもない！いずれにせよ、有用性は大きく、劇は満員である。隊列が一つ消えると、別の隊列がそれに続く。勇氣はあらゆる世代のものだ。しかし、暖炉がこの二つの薪材の壁を焼き尽くし、名もない川が涸れ流れを止めると、パリ、パリの隅々までが、指に息を吹き付けねばならない寒気に対して、他に替わるものがないのだ。だが、そのようなことになるなんて、心配しなくてよい！筏師たち、彼ら疲れを知らない水夫たち、建築家でもあり建造者でもありパイロットでもある彼らが、私たちのために、骨の折れる職能を引き受け続けてくれる。

3月の雨のころ、川の水かさが増し始めると、周辺の地域から、多数の人々、その妻、その子どもたちが集まる。すべての人が入り交じる。力強い若者が積み重ねられた薪材を揺さぶる。薪材は崩れるが、ほとんど事故はない。それから乙女たちが一輪車を近づけ、子どもたちがそれに薪を積み込む。老人たちはこの薪を集め 15 ピエ^{xvii}の長い棒で支える。若者が枠(カードル)の中に薪を入れる。力強くハンマーで打ち込む。このトランのうちの一つをブラーンシュ^{xviii}と呼ぶ。4つのブラーンシュが四角に結びあわせられ一つのクーポンを形づくる。18のクーポンが一つのトランとなる。これらの労働のすべてが川岸で遂げられ、どのブラーンシュも川に運び込まれた時、つまりすべてができあがって、ブラーンシュは、それぞれの間をルエ(原注:直径1ブス^{xix}長さ15から20ピエの棒で、柳の枝のようにしなやかに曲がるように加工されている)で縛り付けられ、一番近くの運河^{xx}水門が開けられた時にいつでも出発できるよう、トランを作る。

どのトランにも二人が乗りこむ。助手は子どもである。働きぶりから借りて、ブート・ダルジュ^{xxi}の名がある。彼はトランの最後尾を操縦する。親方の筏師は先頭を務める。彼は突発的な出来事の場合にしかその場を離れない。奔放な腕前で、彼は、船首で、向かい風を受け、頭には何も被らず、髪を風にたなびかせ、腕を突き立てる。厚織りリンネルのズボン、青いサージのベルト、赤いシャツ、大きな短靴が筏師の習わしとなっている衣装である。それでこそ、腕を絶えず動かし、脚をしっかりと固定させて、必要に応じて右に左に突き進む準備ができていたのだ。彼は、祖先が用心深く慎重に川に架けた、ひっそりと佇む古い橋の、暗く、狭く、偏円のアーチをくぐり、堰を乗り越えなければならない。水流が運ぶトランは、深い堰の底に頭から突っ込んでしまい、壊れるかもしれないし横転するかもしれないのだ！安心せよ、筏師親方は両の手を頑丈な棒で操作し、棒を水底の砂に差し込み、流れを操る。それから棒の反対側の先端を、トランの先頭にしっかりと結びつけられた二つのオレイユの一つに差し込む。流れは絶えず筏に襲いかかる。しかし、そのぞっとするような流れは続かず、薪材の長い蛇はその身体を持ち直し、大抵、その驚くほどの高さの姿を取り戻す。この操縦は大変な熟練を要す

る。人と、波に揺られて不安定なターゲットとの間は、30 ピエも離れている。泡立つ水がとどろき、大きく拡がり、そして集まる。しかし必要な傾斜は十分にある。トランの先頭が狭い通路に入っていく。遙か後ろの、トランのしんがり推進力を保っていないならば、アーチをくぐり抜ける時、次のような簡単な命令が聞こえてくる。 — ブート・ダルジュ、ムーン・オーム!^{xxii} — それでブート・ダルジュは彼の背丈と同じほどの長さの棒を握り、砂利に突き込む。子どものこうした努力によって大きな塊の泡立つ水の勢いが弱まる。これからは、彼らが危険を乗り越え、筏師とその助手が、狭く曲がりくねった、時には深く時には浅く、進むには十分な水量の水路にしたがって、棒をあっちこっちへと幾度も差し込みながら、進んでいくのが見える。道のりは長い。しかもヨヌ川は不規則な川である。筏師たちは、船乗りのように、障害物や暗礁を示す地図を持たない。にもかかわらず、長い経験のおかげで、彼らはどんな障害も知っているし、砂のどんな堆積にも彼らはなじんでいる。運航するために、そしてうまく操縦しなければならぬために、8日から9日を要する100里の道のりには、逃げなければならないこと、あれこれ試さなければならないことのあることが彼らは分かっている。トランは、進み、浮かび、その船体を長く伸ばし、蛇行し、急ぐ。これらの動きはすべて筏師によって跡が残され、あるいは戦われる。今、その船首が水に突っ込む。するとベルトまで筏師は引きずり込まれる。それから船首が起きあがる。そして、息切れしたように、トランは止まるのを望んでいるかのようなのである。これは水の流れて推進されるこの長い機械のあいだの果てしない戦いである。そして曲がったトランの機嫌をとる用心深い筏師は薪材のこの長いリボンの角を守る。それは川の厳しく狭く切り立った両岸をうまくすり抜けるために他ならない。時には水は数プスの深さしかないところもある。すると、水がない我が親方は3、8あるいは9日間、砂で動けなくなる。つまり、彼は座州してしまうのである^{xxiii}。

作品「筏師たち」はこれで閉じられる。続編、つまり座州を乗り越えて無事パリに到着するまでを描いた一文は発見できていない。綴ったのか、綴っていないのかも不明である。作品に描かれている筏はまだヨヌ川を航行中なのであろうか。この後、筏は、モンロー近くでヨヌ川が合流するセヌ川へと舵を取り、後はゆったりと流れるラ・セヌに乗ってパリ入りをし、セレストン港に到着する。筏を作っている薪材は3ピエ半(1.14m)の長さが守られており、そのままが産業用かまどにくべられる大きさとなっている。筏は解体され、薪材がその場で積み上げられ、乾燥される。その後いくつかの流通経路を経て、ある経路は産業用の運搬車に運ばれ、ある経路は家庭用ペチカの薪売りの声によってパリ市中に小売りされ、消費される。

筏師は、パリに到着したその日に航行賃金をそれぞれの薪材筏商社事務所(le bureau de marchand de bois de construction)で受け取り^{xxiv}、1泊程度体を休めはするが、徒歩でクラムシーに戻った。帰路は4日の行程であったという。助手に対して、前記商社事務所から直接賃金が支払われることはなく、筏師にたいして「連れ1人あたり」の手当が支払われると定められている^{xxv}。助手の子どもはオーセールで筏から降ろされ、それからは、別の大人が助手を務めた、という論述もあり、筏流しに関わる児童労働の実態はその詳細が不明である。ただおおよそ一致し

ているのは、この過酷な労働に 10 歳から 12 歳ほどの「ガキ(gamin)」と呼ばれる男児が参加させられていた、ということである^{xxvi}。「ガキ」にとって筏師は絶対的な存在者であった^{xxvii}。

薪材を筏に仕立てて運行する産業には、セガンが作品「筏師たち」で描いたような表文化としての産業風物詩が産み出される一方、苛酷な低賃金労働、不定期労働、年少労働などの他、怪我や疾病という、いわば裏の文化が構造的に産み出されている。セガン「筏師たち」には、これまで述べてきたことから分かるように、産業技術や職能の描写は詳しいが、たとえば「ガキ」と筏師との間の権力関係に象徴されるような、クラムシーにおける民衆の前近代的被抑圧生活あるいは前近代から近代に続く経済的文化的貧困生活はまったく描かれていない。このことは、セガンのクラムシーにおける生活経験の描き方とも共通している。1840 年代の著書に描かれた教育における権力的被抑圧にたいする激しい告発の筆致はあるものの、市井にある一つまり救済院等公的施設には収容されていない—白痴の子どもたちが置かれていたであろう、経済的ないしは文化的貧困に関する記述が見られないことと、共通するものを感じることができるのである。市井にある白痴の子どもたちを描いている場合であっても、それらの子どもは、ブルジョア階級家庭で養育されており、セガンはその子どもたちが「甘やかれていることによって発達が阻害されている」という見方を提出している^{xxviii}。もともとが、貧困者家庭には白痴の子どもが存在しにくい環境であったことは無視し得ないのだろうけれども^{xxix}。

ⁱ E. SEGUIN, *Report on Education*, 2 ed. Milwaukee, Wis. Doerflinger Book & Publishing Co. 1880. p.145.

ⁱⁱ 原綴は rue au bas petit marché.

ⁱⁱⁱ Frédéric MOREU, *Histoire du flottage en trains. Jean ROUVET et les principaux flotteurs anciens et modernes*. Chez DAUVIN et FONTAINE. 1843.

^{iv} クラムシーにはヨンス川に架かるベトレーム橋がある。かつてジャン・ルーヴ橋と呼ばれていた。また、ジャン・ルーヴの胸像が欄干に据えられていた。胸像の建立の除幕式が行われたのは 1828 年 10 月 26 日のことである。「1549 年に筏流しを発明した人、ジャン・ルーヴへ」との碑文が刻まれた。この地域にとって「筏流し」産業の誕生がどれほどに大きな意味を持っていたかを物語るものである。

しかしながらジャン・ルーヴを以て「筏流しの始祖」とすることは誤りではないかという疑問が出され、史家も行政当局もそれを明確に認め、ジャン・ルーヴの名を名実共に「消す」ようになるのは、1945 年のことであった。欄干からジャン・ルーヴの胸像が撤去され、また橋の名はベトレーム橋と改められた。胸像は筏師の立像に取って代えられるのだが、ベトレームという名とセットとなっていることは指摘しておきたい。ベトレームはクラムシー郭外(フォブール)の街区名であるが、筏師集落であった。人々はその街区を「バヤン」と呼びならわしていたが、それは、尊称でもあり蔑称でもあった。

^v アルフレッド・フィエロ著鹿島茂監訳『バリ歴史事典』白水社、2000 年。「薪」の項目(685-686 頁)を参照した。ただし、同項目内容にはいくつかの誤りが記述されている。近年、原史料の発掘、収集、分析等が本格的に着手され、「薪材で作る筏」関係の史料、研究類がいくつか公刊されている。そのうち、質量ともに重量感のあるのが、Les Traîne-Bûches du Morvan・Emile GUILLIEN, *Quand la <<moulée>> du Morvan descendait à Paris*. Les Traîne-Bûches du Morvan, 2007. 2vols. である。

^{vi} *ibid.*

^{vii} たとえば次のような条文内容が例示できる。「筏材商人は、通例、新運河を利用せずして、また池からの水利を利用せずして、当該の木材を取り扱うことはできない故、木材商人は、当該事の専門家ないしは知

見のある人たちの言に従い、当該地ならびに当該池の所有費用を支払うことによって、当該の運河を使用することが許される。また、池からの水利を利用することも許される。」「筏師は、薪材を流す前の10日間、河川運航沿いの道路にポスター掲示によって、工場主及び沿岸地帯の住民（古くは利害関係のある封建領主）に警告を発する義務を負う（1672年12月の勅令、第17章第6条）。公的所有の河川における筏流しであっても、筏の受け取りであっても、前もって知事の許可証を備えなければならない。その場合、失業補償に関しては、工場主に責がある。もし筏師が前記のきまりに従わない場合は、工場主は筏の通行を禁ずることができる。・・・筏流しの安全が確保されるまでは禁止される。」（Léon BÉQUET, *Répertoire du droit administratif... : fondé en 1882, publié depuis 1892 sous la direction de M. E. Laferrière. 1892-1900.*）

viii Christophe CROSBON, *Le flottage à travers les familles clamecyçoises*, tome 1, Clamecy. 1994. p. 38. なお、同書には1872年の筏師数が107人と記されている。筏師の数が19世紀後半になると急激にすくなくなる。19世紀における産業の構造的変化=近代化の影響を強く受けていたことが如実に示されている。

ix P. C. F. DUPIN, *Aux Électeurs du département de la Nièvre*. Charles BOUTIN, *Les Murailles – Révolutionnaires de 1848 pieces et documents*. E. PICARD. Tome II. pp. 20-22. なお、デュパン家はそもそもがクラムシー出身であり、セガンの白痴教育実践にとって意味ある存在であった。このことについては後章において触れることになる。P. C. F. DUPINの生没年は1784-1883。

x 薪材となる木の切り口にはその木の所有者（薪材商）の印(Marque)が焼き付けられた。焼き印の多くがパリの商人であることを示している。Emile GUILLIEN・*Les traine-bûches du Morvan*による精神的な調査が進められているが、*L'écoulange de la moulée sur le Bouvron et le Sauzay*, Clamecy, 1999. pp. 36-37に、例示として、1836年5月度の商人一覧が載せられている。

xi 筏師はかつては法によって旧クラムシー郭外（ペトレーム地区）に居を構えることが定められていたが、19世紀に入ると旧クラムシーにも居を構える筏師が現れる。それだけ筏師が高級職人としての地位を得るようになったことを意味している。

xii 副題に“Bonhomme vit encore.”（「じいさんはまだ生きている。」）と付されたこの作品は、1914に書かれたが、発表されたのは1918年である。本稿を綴るに当たって、Club français du livreが1962年に出版した版を使用した。言うまでもなく、「じいさん」とは16世紀クラムシーの人であり、コラ家の血を引いているロマン・ロランの「ご先祖様」を指している。引用は同書216頁。

xiii 木こりのほとんどは作業現場に粗末な小屋を設け、居住しながら木を切る作業を行う極貧階級の請負季節労働者であり、浮遊民として扱われ差別の対象であった。

xiv Jacques DUPONT, *La vie quotidienne des floteurs*, Société Scientifique et Artistique de Clamecy. *op.cit.*

xv 選り分け出された商品対象外の木枝は決して捨てられることはない。ただたんに、パリに向けての商品とはならないだけで、地元の圧倒的多数の貧民の暖房材として活用される。

xvi E. SEGUIN, *LES FLOTTEURS. (Le Prisme, Album des Français. Encyclopédie morale du dix-neuvième siècle*. L. CURMER. 1841. pp. 40-43.) なお、セガンの創作を収録している本書には編者名が記載されておらず、「前書き」も「後書き」もない。この書物1冊だけを取り上げると編者無き短篇集である。だが同書は、Jules JANISの編集になる*Les français peints par eux-même*（フランス人の自画像）と題する8巻本の別巻として刊行されたものであることから、19世紀前半のフランスの習俗を描き出そうという意図の下にあったことがわかる。

xvii 5メートル弱

xviii 原綴は、branche。

xix 3センチ弱

xx ニヴェルネ運河のこと。18世紀末に開削された運河で、モルヴァンからパリへとつながる。クラムシーはヨヌヌ川とニヴェルネ運河との結節点の一つであり、この運河誕生によって薪材筏流しは他の水運産業との共生がより可能になった。運河開削までは、水運産業ごとに河川利用の時期が定められていた。

^{xxi} 原綴は、*le boute d'argez*。見張り役の意。モルヴァン地方語。

^{xxii} 原綴は、*Boute d'argez, moun houmme!*「見張り番、わが弟子！」の意。

^{xxiii} 作品は1841年出版書籍に収録されたのだから、フランス革命によって度量衡がメートル法基準になってすでに半世紀近く経っている。にもかかわらず、セガンはメートル法以前の度量衡を用いて記述しているわけである。薪材筏作成現場ではメートル法が使われていなかったのだろうか。Emile GUILLIEN・*Les traine-bûches du Morvan* は、クラムシー市立図書館に見られるヨンヌ川の筏師に関わる資料調査の中で、革命後、新しい度量衡が導入されたことを確認している。特にそれは、1799年の大暴動以降のことだという。セガンがこの作品を綴るに当たって使用した当該事資料は革命以前のものであったのだろうか。それともセガンは旧度量衡使用主義者だったのだろうか。後者の問題は白痴教育実践論との対比で検討が可能であるが、その限りにおいて言えば、セガンは白痴教育現場ではメートル法を導入しているのである。

^{xxiv} ちなみに、1840年のCODE（法令）では、セーヌ川両岸沿いに約50の事務所が構えられていたことを知る。*Code du commerce des bois carrés, charpente, sciage et charronnage réunis, pour l'approvisionnement de Paris*. 1840.

^{xxv} *ibid.*

^{xxvi} ちなみに、児童労働に一定の制限を設けるようになったのは、本稿記述対象の年代よりかなり後年の、1841年3月21日の「子どもの労働に関する法律」である。まず、7歳以下の労働を禁止している。8歳から12歳まで8時間、12歳から16歳まで12時間（いずれも一日あたり）の労働時間が定められ、13歳以下の夜9時から朝5時までの夜間労働は禁止された。しかし、この法律における児童労働の主たる対象は、大規模機械工場における労働である。徒弟制の伝統的な技術職やクラムシーの筏作りのような地場産業の労働についてはほとんど意味を持たなかったと言ってよい。

^{xxvii} Jacques DUPONT, *La vie quotidienne des floteurs*, Société Scientifique et Artistique de Clamecy. *op.cit.*

^{xxviii} 詳しくは、エドゥアール・セガン著、川口幸宏訳『初稿 知的障害教育論 白痴の衛生と教育』（幻戯書房、2016年）を参照されたい。たとえば、「権威という道徳観を持っていない人（引用者注：白痴の子ども）によって、常軌を逸するほどまで従わされた人を知っている。」（同書、135頁）言葉を換えて言えば、セガンはそのような家庭に入って子どもの教育に携わることはあっても、巷間に伝えられているセガン像（たとえば、ブロケットの弔辞に「セガン博士はもっとも重要な博愛的事業—白痴の発育の回復と知性獲得の訓練—に43年間、まったくの無償で、つまり彼自身の出費によって奉仕した。」）とは違って、「白痴の子どもを、自腹を切って養い教育した」ことはない。このことについては、後の章で取り扱うことになるだろう。

^{xxix} 遺棄、あるいは公権力による救済院への強制収容などの措置がなされていたことによる。